

卒業論文

西京区のまちづくり ～イベントを通して、感じる西京区～

京都経済短期大学 経営情報学科 今瀬ゼミナール

兼松 裕未

卒業論文
西京区のまちづくり
～イベントを通して、感じる西京区～

京都経済短期大学 経営情報学科

今瀬ゼミナール

兼松 裕未

目次

- I はじめに
- II 研究・活動の概要
 - II-1 研究・活動目的
 - II-2 研究・活動の内容
 - II-3 研究・活動の方法
- III 【研究・活動結果】
 - III-1 西京区の概要
 - III-2 西京区のまちづくりのために考えられたビジョン
 - III-2-(1) まち・人の「つながりを育てる」
～まち・人・活動をつなげよう～
 - III-2-(2) 京都の西の玄関口としての魅力を活かした「しごとを育てる」
～「つながり」から、働いてよしのまちを作ろう～
 - III-2-(3) 西京区ならではの「くらしを育てる」
～豊かな自然とコミュニティに囲まれた「西京ライフ」を楽しもう～
 - III-3 西京区で行われている活動
 - III-3-(1) ふれあいまつり
 - III-3-(2) 西京結び
 - III-3-(2)-① そば打ちの体験を通じて家族との交流と西京区のPR
 - III-3-(2)-② 福祉ネイルのことを知ってもらい「癒し」「元気」「笑顔」を届けたい！
 - III-3-(2)-③ 西京結びで出展する皆さんのお昼ごはんを承ります！
 - III-3-(2)-④ ふれあいまつりに参加している団体等の情報をリアルタイムに発信する
 - III-3-(3) SNSとは
 - III-3-(3)-① Twitter
 - III-3-(3)-② Facebook
 - III-3-(3)-③ LINE
 - III-3-(3)-④ Instagram
 - III-3-(4) SNSを使うメリットとデメリット
 - III-3-(4)-① メリット
 - III-3-(4)-② デメリット
 - III-3-(5) ふれあいまつり出展後の改善点
 - III-3-(5)-① ガラケーの対応が必要

Ⅲ-3-(5)-② Facebook登録

Ⅲ-3-(5)-③ ネットに写真をあげることの抵抗の軽減が必要

Ⅳ おわりに

Ⅴ 参考文献

I はじめに

日本全体を見たとき、一部の地域では人口が減少し、維持することができない村も出てきている。都心のような人が集まる地域では、人が住みやすいようにまちづくりがされているが、都心から離れてしまうと少子高齢化などの原因を含めてまちづくりが行われず、住みにくい地域になってしまう。筆者が住む京都府京都市西京区では、嵐山や松尾大社など観光名所が多数ある。しかし、全国的に少子高齢化が問題になっていることを考えると、この地域も対策をおこなって行かなければならない。そこでどのようなまちづくりが行われているのか、筆者は、「自治と協働による地域づくり」をテーマに京都府京都市西京区のまちづくりについて研究・活動を行う。

II 研究・活動の概要

II-1 研究・活動の目的

筆者の住む京都府京都市西京区では、観光地が多く、訪日外国人や地方から来られる方もいる。多くの方が来られる地域でありながら、地域に長年住んでいる方もおられる。筆者は人が集まる地域は、どうしても長年住んでいる地域の方が住みにくくなるというイメージがあった。なぜ、様々な人が来る地域で長年住むことができるのか。どのようなまちづくりを行うことで、地域が活性化するのか。京都府京都市西京区のまちづくりを探っていき、研究・活動を通して今後の課題を挙げることができれば、さらに地域活性化が図れると考えた。

II-2 研究・活動の内容

研究・活動目的をもとに、京都府京都市西京区についての実態を調査した。調査した中で、西京区が掲げているまちづくりのためのビジョンというものがあり、これをもとにボランティア活動など行われている。そのボランティア活動にも参加し、活動を通して地域住民にお話を伺う。ボランティア活動では、西京区で最大ともいえるイベント「ふれあいまつり」に参加し、SNSを使って情報を発信する活動を行った。様々なSNSを使いこなすためにも、各SNSの使用目的やメリットとデメリットについても調査した。そのボランティア活動での結果を踏まえて、新たな課題を挙げて次回に活かせるようまとめる。

II-3 研究・活動方法

研究・活動は、文献調査と現地調査をおこなった。文献調査では、京都府京都市西京区の概要や各SNSの使用目的などについて調べた。現地調査では、筆者自身がボランティア活動をしている団体と一緒にふれあいまつりに参加し、ボランティアに参加した方に西京区のまちづくりについて聞き取りをおこなった。

III 【研究・活動結果】

III-1 西京区の概要

西京区は2018年で41年目になる。桂川を境界線に分区したもので、もともと右京区だった。現在の西京区の人口は約15万人（2015年国勢調査）であるが、西京区になった当時の人口は約9万人だった。また、京都市11区の中では4番目に人口が多い。西京区の総人口に占める65歳以上の人口の割合が2010年から2017年までに6.7%も増加している。高齢者が多いと言われている日本だが、逆に若い世代を見たときにはどうなのか。20歳以下の人口を調査によると、西京区は15歳未満が12.1%だった。これは京都

市11区の中で最も割合が多く、最も割合が少なかった京都市東山区の6.5%と比べ、2倍ほどの違いが視られた。この結果から西京区は、子どものいる世帯が多いということが分かる。このことから区民にとって西京区は、多くの施設があり、年齢問わず、比較的住みやすい地域だと言えるだろう。洛西ふれあいの里や京都桂病院などの介護福祉施設や医療機関も多く、かかりつけの病院を見つけることができるだろう。また、小学校が18校、中学校が8校など教育機関や桂川地域体育館や小畑川中央公園などの運動施設もあり、子どもだけでなく、高齢者も健康のために運動することができる施設が多くある。大阪府や滋賀県にも近く、阪急洛西口駅や隣接する南区のJR桂川駅などの連絡機関の開発や整備も行われているため、都心に出やすく、訪れやすい場所になっている。付近には、イオンモールや高島屋、洛西ニュータウンショッピングセンター（ラクセーナ）などの店舗も充実しているため、生活するにあたって大変便利であり、核家族以外にも学生などの一人暮らしの人でも住みやすい地域である。さらに、環境も良く、京都でも有名な桂川や観光名所の嵐山などの自然も多く、その自然の中にある法輪寺や松尾大社、西山山麓の勝持寺（花の寺）や大原野神社などの文化や歴史についても知る事ができ、観光地としても人気の場所が多く、西京区の文化・歴史を堪能しながら住むことができる。

Ⅲ-2 西京区のまちづくりのために考えられたビジョン

筆者は、西京区に住んで、非常に住みやすい地域だと感じていた。なぜ住みやすいのか。文献調査によると西京区に長年住んでいる区民の方などは、さらに西京区をよくしたいと考えていた。そこで地域住民が同じ方向性に向かうよう、現時点で区民が地域に関してどのように感じているかアンケートを取り、『未来に向かって輝け住みよい西京区！』というビジョンのキャッチコピーを提案していた。そのキャッチコピーをもとに、以下の3つのビジョンを掲げている。区民、ボランティア団体や区役所などはこれらをもとに地域づくりに取り組まれているようだ。

Ⅲ-2-(1) まち・人の「つながりを育てる」

～まち・人・活動をつなげよう～

西京区は、防災や防犯などの活動をして、まちを賑わせようとイベントを開催する人や芸術や音楽などの活動をして、関心のあるテーマを掘り下げる人など、多くの方がさまざまな活動を行っている。しかし、活動を行っている方々は、お互いがどのような活動をしているのかが分かかっておらず、活動を行う人同士の「つながり」があまりないため、連携できる可能性が低いと感じている。下記は、西京区民が感じる現状と課題をもとに考えられた方向性であり、さらに地域活性化をするために人同士の「つながり」をつくるためのである。

・各地域で活躍している区民・団体がつながり、多様な活動同士のコラボレーションや地域課題の解決に向けた取組が更に進むことで、西京区・洛西地域のまちやくらしがより豊かになることを目指す。

・地域社会の中でみんなが楽しく、豊かに、心地よく暮らせるまちを目指して、身近な地域の中でのつながりを大切にし、まちを楽しくする交流の場や語り合いの場、様々なジャンルの出会いの機会を創出することで、地域内に多種多様なつながりを育てる。

・子どもや若者が地域の大人や活動・事業などと積極的な関りを持てるようにすることで、西京区・洛西地域に愛着を感じてもらおう。

Ⅲ-2-(2) 京都の西の玄関口としての魅力を活かした「しごとを育てる」

～「つながり」から、働いてよしのまちを作ろう～

西京区は、自然や地域産品、歴史豊かな社寺や史跡があり、魅力的な地域資源がたくさんある。また、阪急洛西口駅やJR桂川駅の開業や高速道路のアクセス向上もあり、京都市都心部や嵐山などの観光地にアクセスしやすい場所でもあり、大阪にも近く、観光以外にも「ビジネス」としても利便性のある地域である。しかし、住むのは便利で快適な地域だが、「ビジネス」の場としては資源や人を活用できていない。西京区をよくするためにも、さらなる魅力アップを目指し、西京区の資源や人を活かして、「しごと」を創出するための取り組みを行う必要がある。下記は、西京区の「しごとを育てる」ための現状と課題に対しての方向性である。

- ・西京区の特徴は多様な個性を持つ地域が集まっていることにあり、その魅力を発信するためにも、まずは区民自身がそれぞれの地域の魅力を再確認・再発見し、それらを自ら楽しむことから始める。
- ・良好な住環境や豊かな自然環境など「郊外」としてのまちの魅力を大切にしながら、学術機関に集う多くの研究者や学生、市内有数の農業資源、個性のある歴史文化資源、高速道路による広域アクセスなど、都心とは異なる、西京区ならではの資源を生かした「しごと」の創出を目指す。
- ・西京区内の様々な人々や学術機関、企業、農業などのつながりを育てることで、コラボレーションを誘発し、新たなサービスや魅力を創出することを目指す。
- ・様々なアイデアや特技を持つ区民のやりたい気持ちを育て、やりたいことが実現できるまちを目指す。

Ⅲ-2-(3) 西京区ならではの「くらしを育てる」

～豊かな自然とコミュニティに囲まれた「西京ライフ」を楽しもう～

京都府は、きれいな街並みが特徴的だが、西京区も計画的に整備されたきれいな街並みである。住宅地が多く、洛西ニュータウンや桂坂などバリアフリーも配慮されており、豊かな自然も多い。また、駅にも近いので、高齢者や子育て中の家庭なども住みやすいと評価されている。その中でも、子どもをのびのびと育てるための保育サービスや遊びの場の充実や高齢者が安心して暮らせる環境が求められている。しかし、コミュニティが希薄化している。下記は、西京区の「くらしを育てる」ための現状と課題に対しての方向性である。また今後は、西京区ならではのまちの資源を取り入れた暮らし方を「西京ライフ」として、老若男女問わず、区民の誰もがいきいきと暮らせることを目指し、「住まい」「コミュニティ」「くらしの安心を支える仕組み」「交通」「生きがい」などを充実させる取り組みを行う。

- ・西京区内には「良質な住宅地」「良好な教育環境」「通勤便利性」「豊かな自然」「駅前のにぎわい」など、子どもからお年寄りまでが住みたくする多様な要素が揃っており、これからの資源・機能をリニューアル・コラボレーションしながら活用して、より魅力のあるまちにする。
- ・西京区・洛西地域ならではの、豊かな自然や農業、まちの歴史などを生活に取り入れ、他のまちでは味わえない個性あるライフスタイルを送ることができるまちを目指す。
- ・高齢者への買い物支援や子育て家庭への育児支援といった暮らしの困りごとについて、地域内で支え合える仕組みを備えるなど、子どもからお年寄りまでが安心して暮らせるまちを目指します。また、その仕組みを学生も含めた多くの区民の参加により推進する。
- ・西京区・洛西地域のライフスタイルを支える交通環境の整ったまちを目指す。
- ・西京区の豊かな自然環境や住環境において、心身ともに健康に暮らすことのできる健康長寿のまちを目指す。

Ⅲ-3 西京区で行われている活動

Ⅲ-3-(1) ふれあいまつり

京都府京都市西京区でも最大ともいえるふれあいまつりは、多くの来場者で毎年にごわっている。秋頃におこなわれるイベントで、ボランティア団体や地域の人が西京区を盛り上げようと協力し合っている。飲食コーナーやステージの出し物などがあり、ステージの出し物では、西京区の幼稚園や中学校、老人ホームや地域で行われているサークルなど様々なステージを楽しむことができる。飲食コーナーでは、温かい食べ物や西京区の特産物などの販売をおこなっている。また体験コーナーもあり、実際に体験しながら西京区を知ってもらうことができる。

Ⅲ-3-(2) 西京結び

西京結びは、区民の方、一人ひとりの「得意なこと」や「やりたいこと」を持ち寄って、具体的な「アクション」を生み出していくことのできる場である。自身の夢や思いを参加者と話し、それぞれの得意なことを組み合わせ、夢のままでなく「アクション」を起こそうということが目的である。実際、平成29年度の西京結びでは、8つのプロジェクトが生まれ、それぞれのチームがアイデアの実現に向けて活動を行っている。「音楽劇団をつくるためのワークショップ」や「お弁当屋さんを開く夢の実現に向けて一歩ずつ準備する」といった具体的なアイデアから仲間を集めていくチームや、「西京結びを盛り上げるための人材をつなぐ役割を担う」といった具体的なアイデアを持った方々を合わせて、プロジェクトを膨らませていくチームなど、様々なチームがそれぞれのアイデアを少しずつ形にしている。参加は自由だが、西京区のまちを楽しくするために自ら活動したいと考えている方に参加資格としている。参加者の年齢層は上の方が多いが、参加者全員が地域の活動に意欲的であり、西京結びだけでなく、いくつかのボランティア団体に所属しているためか、とてもアイデア豊富な方が多い。そのためか、参加してみることで様々な知識を得られる場であると言えるだろう。筆者はこの西京結びに参加し、西京結びのチームで、ふれあいまつりにブースを出展することになった。チームでは、以下の4つのプログラムをもとにブースを展開していくことになっている。アイデアを出し合うことで、次のステップとしてふれあいまつりに参加することができた。4つのチームは西京結びからの出展となるが、筆者を含めそれぞれが所属のチームがあり、当日までチームごとに話し合いを行っていく。しかし、参加者全員が、すべてのチームの活動内容を知ることができるよう、話し合いの最後には報告会があるため、各自が所属するチーム以外の情報も確認することができる。

Ⅲ-3-(2)-① そば打ちの体験を通じて家族との交流と西京区のPR

アイデアの出た中には、西京区は竹が有名であるため、「竹でイベントの各場所にベンチをつくり、設置していこう」というものやそば打ちが得意だから「そば打ち体験と手打ちそばの販売をしよう」、「地元のオリジナル品をつくる」など、さまざまなアイデアが出た。そこで、「竹の活用」ができ、「そば打ち体験による交流」ができるということをメインテーマに、ふれあいまつりでは、そば打ち体験と竹の入れ物作りとふろしき作りと竹のベンチを提供しようとなった。

Ⅲ-3-(2)-② 福祉ネイルのことを知ってもらい「癒し」「元気」「笑顔」を届けたい！

福祉ネイルとは、あまり馴染みがない言葉だがいったいどんなものなのか。筆者もこの活動に参加したことで知ることができた。もともと福祉施設に出向き、ネイルサロンに来店できない高齢者や障がい者などにネイルサービスを通じ、「癒し」「元気」「笑顔」を届けたいということだった。また、ネイル

をすることで認知症の予防になることも学会で研究されている。まだまだ福祉ネイルという言葉の認知度が低いため、施設訪問が難しいことがある。これを機に福祉ネイル」というものを広げていくことができれば、京都の介護施設に訪問することが可能になるだろう。その第一歩として、ふれあいまつりに参加出展し、「福祉ネイル」を知ってもらう体験をすることで、子どもから高齢者まで喜んでもらう取り組みをする。

Ⅲ-3-(2)-③ 西京結びで出展する皆さんのお昼ごはんを承ります！

昨年からの参加になるが、参加の目的については、お弁当屋さんを出店することが夢だという方やお料理をすることが得意という方が主催で行っている。今回の参加では、ブースでの活動ではなく、西京結びのブースで活動する出席者のまかない弁当として提供できないかということだ。また、提供することで意見や感想を今後の活動に活かすことができたなら、夢に近づくことができる。ブースに出展することが、すべてではなく、目標に向けてのきっかけであることが、重要だと考える。

Ⅲ-3-(2)-④ ふれあいまつりに参加している団体等の情報をリアルタイムに発信する

西京区もりあげ隊としてイベントの情報発信を行うチームである。筆者は、このチームに所属し活動を行う。「西京区の点をつないでネットワークをつくる」ことがテーマである。西京区についてどのように広めることができるのか。最近では、SNSが普及しているが、高齢化が進むなかで、高齢者がSNSを使いこなせることは少ないであろう。また、今更教えてもらう機会もないため、SNSの使用率が若者と高齢者では開いてくるだろう。そこでこのチームでは、SNSを含め、PCや携帯でのインターネット操作などを知ってもらい、同時にふれあいまつりをリアルタイムでFacebookに「Re：洛西」でアップして、ブースに来なくてもイベントに来られた方が参加できることをする。さらに、ふれあいまつり来られた方だけでなく、他ブースを出展している参加者にもご協力お願いして、準備段階からFacebookに投稿してもらうことで、よりふれあいまつりでどのようなことをしているのか知ってもらい、イベントを盛り上げることができると考えている。話し合いで情報発信のグループでは、SNSに上げてもらうための工夫として手持ちの顔出しパネルをつくることで、普通に写真を撮ってSNSに上げてもらうよりも、イベントに参加したことが分かるような写真にする工夫ができると考えた。個人のSNSに上げてもらうより、具体的に活動内容やイベント情報をリアルタイムで知ってもらうため、ふれあいまつりにつくられたFacebookのアカウントに上げてもらう。このアカウントを「Re：洛西」としている。Facebookの「Re：洛西」へ写真を投稿してもらうための工夫として、より簡単にアップできるよう、「Re：洛西」のQRコードをブース前やポスターに提示することで、すぐに検索することができるようにする。PCや携帯でのインターネット操作について教える場所を設置するが、高齢者や携帯に詳しくない方のサポートを行い、操作を教えることに意味があるという意見が出た。操作ができる人がやるのではなく、SNSを含むインターネット操作ができる人を増やすことで、高齢者でも携帯に詳しくない方でも、たくさんの人とつながるツールを増やすことができる。こういったツールを増やすことでさらに地域の情報を得ることができ、イベントなどにも足を運ぶ機会ができれば、地域全体の地域活性化につながることを考えている。また、参加人数の目標として、今年のふれあいまつり来場者数の13,000人以上を目指す。今回の活動の利益は、収入ではなく、参加人数にあると思われる。情報発信のチームでは、金銭の取引ではなく、情報のやり取りのため、最終的に何人の方が写真を撮り、Facebookで「Re：洛西」に投稿したのか。また、何人の方がSNSを含むインターネットを使いこなせることができたのかを重要視している。

Ⅲ-3-(3) SNSとは

先ほどからSNSと出てきているが、いったいどういったものなのか詳しくは知らない。筆者は、このイベントを行うまでSNSを面倒に感じ、あまりやっていなかった。イベントに参加し来場者にSNSを知ってもらうには、筆者自身知るべきだと感じた。調査する中で、必要ない人も多いことが分かった。そもそもSNSとは、**Social Networking Service**（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）の略で、社会的なつながりを提供するサービスということである。代表的なSNSでいうと、**Facebook**や**Twitter**、**LINE**、**Instagram**などがある。SNSの特徴として、まず名前や年齢、生年月日、性別、居住地域、出身地、学歴、職歴、趣味、所属団体などの自分自身のプロフィールを作成し、公開することで自分がどのような人間なのかアピールをする。写真や文章を投稿することでより自分というものをアピールすることができる。文章は長いものではなく、「〇〇食べました。」や「〇〇行ってきました。」などの感想や報告を書くことで、ある意味、簡単な日記のような率直なことを書くことが増えているらしい。写真についても「インスタ映え」などの言葉があるように、撮影した写真をそのまま投稿するのではなく、加工や盛るなどといった工夫を凝らしながら、より見栄えのよいカラフルなキレイな写真を作るといった方向へ変わってきている。こうした工夫を行うことで、自分の投稿に「いいねボタン」を押してもらえることが増え、多くの人に自分を知ってもらえることができる。また「いいねボタン」は投稿に対しての感想を簡略化・短縮化し、主義主張というよりは共感を示す機能になってきている。SNSを使っている人の多くは、投稿の内容や目的によって種類を変えている。これはそれぞれのSNSの特徴を持っているからだ。それを紹介していこうと思う。

Ⅲ-3-(3)-① Twitter

10代・20代の若年層で特に流行っている。ツイート（つぶやき）という短文を投稿するもので、気軽な人間関係を築くことができるサービスである。また、他人のつぶやきを転載することのできるリツイートという機能があり、情報が広まる拡散という特徴をもっている。しかし、拡散することで問題が起きることがある。リツイートによる拡散が世間の思わぬ反応を生み、炎上という現象を起こしてしまうことがある。

Ⅲ-3-(3)-② Facebook

プロフィールや日記のような投稿にコメントをもらうサービスである。他のSNSがハンドルネームなどを許可しているのに対して、**Facebook**は基本的に本名（実名）での登録を義務化している。そのため、30代・40代の社会人を中心に利用が多い。また、顔写真も掲載している人が多いことから、ビジネスでの利用が活発で現実社会への影響力が強いことが特徴である。

Ⅲ-3-(3)-③ LINE

若年層から年配層まで幅広いスマホユーザーが利用しているSNSサービスである。登録には、携帯番号が必要になるため複数のアカウントを取得するのは難しく、比較的家族や友人などの親しい間柄でのコミュニケーションツールである。また、サークルやクラスメイトなど様々なグループを作ることができる。そのグループでは、グループチャットやグループ通話という機能がある。スタンプと呼ばれるトークのなかでユニークな画像を送ることなど、面白い機能も特徴的である。

Ⅲ-3-(3)-④ Instagram

通称インスタと呼ばれる写真の投稿を中心としたSNSである。これまでは、文章を使ったSNSが中心であったが、流行に敏感な20代・30代の女性ユーザーを中心に急速に広まっている。一般人だけでなく、芸能人や有名人のアカウントも増加傾向にある。オシャレで見栄えのいい写真を意味している「インスタ映え（SNS映え）」という流行語も生まれている。また、フォロワー数が多く影響力の強いユーザーの中には、企業からの依頼により商品紹介やプロモーションを請け負って報酬をもらう「インスタグラマー」と呼ばれる人たちも登場してきている。

Ⅲ-3-(4) SNSを使うメリットとデメリット

SNSについては知ることができたが、SNSに対する抵抗や不信感が残っている。ニュースでもテレビ番組でもSNS関連の問題や事件などもよく耳にする。SNSをやっていない人からすると、不安要素が多いことでSNSをやってみようという気にはなれない。そこで、SNSのメリット、デメリットを知ることによってSNSをおこなっても、被害にあわないように対策できるのではないかと考えた。

Ⅲ-3-(4)-① メリット

- ・友達と電話やメールをしなくてもやり取りができる。
- ・昔に仲の良かった友達に再会できる。
- ・自分の好きな有名人の最新情報やプライベートが見ることができる。
- ・自分が欲しい情報を探しやすい。
- ・SNSを通じて友達が増える。
- ・オフ会に参加することで面識のある友達ができる。
- ・自分のことを宣伝するために活用することができる。

上記に書いたようなことが挙げられる。実際にSNSをやっている人を見ると、最新の情報を持っていたり、流行について詳しく知っていたり、またイベントやオフ会に参加している人が多いと思われる。家族などには連絡を取ることは比較的簡単であるが、中学、高校時代の友人やイベントで知り合った友人など、頻繁に連絡をとらない人の場合、SNSでつながっておくことはとても有効的であるといえるだろう。何度も言うが筆者は、SNSをあまりやっておらず、詳しく知らないが、今回の調査でやってみたいと感じた。

Ⅲ-3-(4)-② デメリット

- ・自分の情報が特定される危険がある。
- ・見る必要のない情報まで目に入り、ストレスが溜まる。
- ・不特定多数の人が利用しているため、トラブルに巻き込まれる可能性がある。
- ・対策をしていないとフィッシング詐欺や何らかの商品の売買を装った詐欺にあう可能性がある。

SNSには、メリットだけでなくデメリットもある。デメリットの中には、自分の情報が特定されてしまうことに対して、今回のイベントでの活動もこのような問題がある。Facebookのように本名で登録しているものは、本名から様々なことを調べられてしまう可能性がある。他のSNSも同様に写真など

を上げた場合、写真の撮った場所の住所などの特定やその人の生活の行動パターンなどが読まれてしまうことがある。これによって、ストーカー行為や詐欺が起こってしまうことがある。また、インターネット上で会ったことない人とやり取りのできることは、魅力の一つだが、だからこそ自分の知らないところで事件に巻き込まれることもありうる。よく聞く事件の中には、インターネット上で知り合った人と会ってみると変質者であったり、インターネット上で何かを非難や意見をすると、被害届として正式に賠償金を払わないといけなかったりと、思いがけないところで事件に巻き込まれることがある。しかし、デメリットがあるとわかっていてもやめられないのがSNSである。筆者は、「みんながしているから」「意識をして気を付ければ」という油断が最大のデメリットであると考え。また、必要のない情報も多く飛び交っている。その中で見たくないものなどの情報も流れてくるため、精神的に参ってしまうこともある。スマホ依存症という言葉も出てきたが、SNSが流行っていったことで、情報を得るためにスマホが手放せなくなり、スマホ依存症につながっているのだと感じた。これらのことから、自身でSNSの使用を抑えることができるのであれば、被害に遭う確率も低くなり、依存症になることもないだろう。また調べていて分かったことは、SNSをしている人が多いことばかり言われているが、実際やっていない人も多いことが分かった。SNSをやっている必要がなかったと感じる人やもともと必要ないと感じている人もいることから、周りがやっているからといってSNSを始めることはないと思った。しかし、様々な方と出会いたいと感じる方やいち早く流行りを知りたい方などは、SNSを程よく使うことは、とても良い使い方だと感じる。

Ⅲ-3-(5) ふれあいまつり出展後の改善点

イベント当日は、天候やブース設置場所など、かなり良い条件であった。しかしながら、ふれあいまつりに参加したなかで、筆者が感じた改善点を挙げていきたい。これは、イベント失敗というわけではなく、次に活かしてもらうためにも、筆者なりの考えをまとめたものである。

Ⅲ-3-(5)-① ガラケーの対応が必要

イベント来場者のすべての方がスマートフォンではないことは考えていたが、イベントで呼び込みを行っていて感じたことは、考えていたよりガラケーが多いということだった。特に高齢者の方に比較的多かった。これでは、イベントや西京区の情報をリアルタイムで知ってもらうことや地域の方とのつながりをつくるためのツールが難しくなってしまう。なかには、ガラケーだけ自宅にパソコンがあるという方もおられたが、パソコンを持っている方というのも少なく感じた。思い出としてイベントの写真撮ることは可能だが、SNSに写真を上げたり、リアルタイムでの情報のキャッチができなくなってしまう。イベントボランティア側がSNSに上げることも行っていたが、写真を撮った本人が写真がどのように扱われているかが、確認できないので不安にも感じるだろう。そこで、解決策を考えていきたい。もちろんガラケーをスマートフォンにしてもらうことは、とても難しいことである。しかし、写真がどのように上がっているのかを確認してもらうことはできるだろう。実際にイベントでもどのような感じで上がるかを「Re:洛西」を見せながら説明していたが、SNSに投稿するところは確認してもらっていない。Facebook以外のSNSを知っている方については、そこまで写真をネットに上げることに抵抗はないだろう。しかし、ネットの使い方を知らない高齢者の多くの方は、抵抗があると感じた。だからこそ、しっかりと説明が必要だと感じる。撮った写真を投稿する前に投稿可能か確認を行う。投稿のやり方がわからないと言われる方が多いので、投稿可能であれば、一緒に投稿するまでの過程を見てもらうことで、別の目的で使われていないことや不安を解消することができ、Facebook以外のSNS

Sを始めるきっかけづくりもできる。

Ⅲ-3-(5)-② Facebook登録

声かけを行っていて感じた一つに、Facebookの登録してもらわないと投稿できないということが、来場者の参加を減らしていると考えられる。Facebook以外のSNSを行っていたり、Facebookの登録もされている方には、比較的写真を上げることは面倒ではないが、登録からおこなうところから始める方にとって、とても面倒であるといえる。今回のイベントでは、QRコード記載しているチラシを配り、見ていただくことも自宅で個人的に投稿してもらうためにも、とてもいい方法だと感じた。しかし、登録しなくても可能な方法はないのか。これは新しい方法を考える必要があるのではないか。また他のInstagramやTwitterなどはFacebookに比べて登録している人が多く、普段から頻繁に使用しているように感じる。今回のイベントでは、Facebookだけでイベント情報を発信することだったため、次回行うときはツールを増やして、イベント情報をたくさん上げてもらえるようにするとよくなると考えられる。

Ⅲ-3-(5)-③ ネットに写真をあげることの抵抗の軽減が必要

やはり写真をネットに上げることは一番の改善点になるだろう。ふれあいまつりで、声をかけた方の中には、まったく抵抗がない方もいるが、ネットに写真を上げることで問題に巻き込まれるのではないかと感じて、写真をネットに上げることを拒む方もいた。その半数が、子ども連れの保護者の方である。現在、保育園や幼稚園など様々な施設では、他人と一緒に撮った写真を勝手に上げてはならないというルールができています。例えば、保育園や幼稚園の場合、自分の子供と他人の子供が友達同士一緒に撮った写真をあげてはいけません。親同士がネットに写真を上げることを了承し合っている場合はこのルールは必要ないだろう。だが、もし運動会や発表会の人が集まる場所で写真を撮ったとき、撮った本人たち以外の方がうつっているものを上げてしまった場合、そのことが原因で問題になることもある。それが保護者同士や子ども同士の関係につながることもある。またSNSは不特定多数の人たちが閲覧しているのでひどい場合には、誘拐や殺人などの事件に巻き込まれるなどのことにも発展するかもしれない。そう考えると安易にネットに写真をあげることはできない。ふれあいまつりでは、子ども連れの保護者のかたの抵抗が多かった。写真以外にもイベントの盛り上がりを伝えることのできるツールを考えなければいけない。特に子ども連れの方を目的としたものを用意できるとなお、いいのではないかと思う。

Ⅳ おわりに

もともと子ども対象のボランティアを行う研究活動を企画していた。ボランティアを企画しているときは、考える企画はできるものとして考えていた。しかし、企画を綿密に決めていくことで、様々な機関や人様を巻き込んで行うことや最低限の費用でも大きいことに気づいた。学生時代はボランティアに参加する立場だったことで、知りえなかったことが多かった。そこで西京区役所の担当の方に企画の提案をした際に、西京結びについてお話を伺った。西京結びの参加者は、一人ひとりができることを持ち合わせて、夢を実現させていた。情報を発信したい、写真を撮りたい、お弁当を作ってお店を持ちたい、西京区の良さを知ってもらいたいなど夢はそれぞれだが、個々人が自分にはなにができるか考え、協力することで一つの目標が達成できる。今回の西京結び及びふれあいまつりでは、個々人で考える夢や目標があるが、ボランティア活動を行う理由の一つには、西京区のために何か活動を行いたい、貢献したいと考えている方がほとんどであった。そのためなのか、情報発信の西京区もりあげ隊以外のチーム

の福祉ネイルチーム、そば打ち体験チームとも協力し合い、イベントの盛り上げをおこなうこともできた。さらに情報発信の西京区もりあげ隊での活動で、ふれあいまつりで出展している各団体の方々にお話を伺うことができ、またFacebookに各出展ブースの写真を上げることができた。これはこの活動の最大の収穫である。情報発信のチームでは、SNSを使って情報を発信したり、集めたりすることだけでなく、SNSを通じてイベントを盛り上げることも行っていたので、ふれあいまつりに出展している各ブースのご協力もあり、リアルタイムでイベントの盛り上がりを発信できたことは、第一歩としてとても好発進であったといえる。また、今回の活動では、ふれあいまつりに参加し、多くの方にFacebookなどのSNSでイベント情報をリアルタイムで発信することが目的だったが、始まりに過ぎない。改善を加えることでさらに、西京区の活性化に繋げていけるだろう。さらに今回ふれあいまつりに出展していた各ブースの方にも今後の出店情報やイベント参加呼びかけなど行ってもらえるツールの一つになると、西京区の盛り上がりを発信することができるだろう。ぜひ、今後の活動に活かしていただきたい。もし、何か行動を起こしたいと感じている方は一人ではなく、団体のボランティアなどから参加し始めることで、何がやりたいのか明確にわかるかもしれない。その第一歩として、西京区のイベントは活動しやすい地域だ。もともと多くの地域活動を行っていた区であり、地域の団体に所属する人自体、一般の西京区民が多いのでぜひ参加していただきたい。西京区の地域活性化について活動するだけでなく、どんな街なのか話を聞く講演会なども多く開かれている。だからこそ、西京区民は自身が住む地域に関心を持ち、活動している方が多い。機会があれば、今回のことを活かしたイベントを主催したい。

V 参考文献

西京区・洛西地域の新たな活性化懇談会（2017年2月13日）

「西京区・洛西地域の新たな活性化ビジョン」 京都市情報館

<http://www.city.kyoto.lg.jp/gyozai/cmsfiles/contents/0000214/214627/vision.pdf>

（2018年7月3日 閲覧）

京都市西京区役所（2013年3月19日 発行）

「西京区の概要」 京都市西京区

<http://www.city.kyoto.lg.jp/nisikyo/page/0000110970.html>

（2018年12月3日 閲覧）

京都市教育委員会（2018年4月1日 発行）

「京都市立学校・幼稚園のホームページ一覧」 京都市教育委員会

<http://www.edu.city.kyoto.jp/hp/#top>

（2018年12月3日 閲覧）

総合企画局情報化推進室統計解析担当（2017年10月1日 発行）

「平成29年10月1日現在の行政区別年齢別推計人口」

京都市オープンデータポータルサイト

<https://data.city.kyoto.lg.jp/node/93678>

（2018年12月3日 閲覧）

西京区役所地域力推進室（平成30年5月発行 第304202号）

「西京結び 参加申込書のちらし」西京区民ふれあいまつり事業実行委員会

（2018年12月3日 閲覧）

とはリサーチ管理人

「SNSとは」 とはリサーチ

<http://www.toha-search.com/it/sns.htm>

（平成30年10月 閲覧）

ネットサバイブル編集部（2017年8月10日掲載 2018年9月22日更新）

「リスクが高すぎる？SNSをやる7つのメリットと5つのデメリット！」

ネットサバイブル

<https://netsurbible.com/sns-merit-demerit-risk>

（2018年12月3日 閲覧）